シーワールドのアニマル達

●フンボルトペンギン

ペンギンといえば南極、氷に囲まれた寒い所にだけ棲んでいる動物だと考える方も多いと思いますが、フンボルトペンギンは、フンボルト海流という寒流が流れる南アメリカの太平洋岸に棲んでいます。

現在、当館には、ペンギン展示プールにいる８羽とアシカショーに登場して人気を得ている当館生まれのペンギン３羽の計11羽を飼育しています。ペンギンプールには、オープン以来、ペアを組み、今までに６羽の二世を生み育て、息もピッタリの「黄青」と「赤白」夫婦，一年前までショーに出場していた当館生まれの二世「カル」とペンギンのローラースケートで人気者だった人工育すう育ちの三世の「プッチー」の新婚ペア等がいます。このペアは、春に産卵しましたが残念ながら無精卵でした。しかし、三代そろっての繁殖も間近いものと思われます。また、たいへん仲が良く、いつも一緒に散歩や遊泳を楽しんでいる姿を見ると、全くほほえましい限りです。

ペンギンは、相手の個体が死んだり、いなくならない限りペアを変えないとされていましたが、そうでない場合もあるようです。「ダダ」というオスの個体は、２羽の若いメスのどちらとペアーを組むか、葛藤している様です。また、メスの間でも、もめている様で時折こぜり合いが見られる時もあります。　（高橋真）

▲フンボルトペンギン　*Spheniscus humbolti*　の親仔

●新しい仲間ペヘレイ

ペヘレイ？聞きなれない名前の魚ですが、トウゴロウイワシ科に属する魚で、ボラに似た形をしており体の中央に美しい銀色の帯が走っています。南アメリカのアルゼンチンやウルグアイなどの淡水や汽水に住んでいて大きくなると全長60㎝、体重１㎏位になります。ペヘレイという名前は「魚の王様」という意味で、日本のアユ、北アメリカのユーラコンと共に世界三大美味魚の一つとされています。

当館では、パノリウムで今年３月よりこのペヘレイの展示を開始しました。美しい姿に人気があり、特に尾ビレが光線の具合で鮮やかな水色に見える時など、お客様は驚かれるようです。この魚は生息水温の巾が広く、予備水槽から展示水槽へ移動する時には、5℃もある水温差にも短時間で慣れてしまいました。餌は冷凍アミや配合飼料など何でも良く食べます。このようなところから養殖の新魚種としても注目されています。しかし、この魚は、堅くて丈夫そうなウロコをしているにもかかわらず、大変傷つきやすく、移動する時などは水ごとビニール袋で運ぶなど細心の注意を必要とするなど、展示には少々やっかいなことがありました。また、臆病なところもあり、傷ついた魚を取り上げようと水槽に手を入れたり、お客様が水槽をたたいたりすると驚いて壁面にぶつかってしまうものもいました。　しかし、今ではお客様にも慣れ、十分にその美しい姿を見ていただけるようになりました。　（小坂）

▲ペヘレイ　*Odonthestes bonariensis*

さかまた No.27

（禁無断転載）

編集・発行　鴨川シーワールド
〒296 千葉県鴨川市東町1464－18
☎(04709) 2－2121

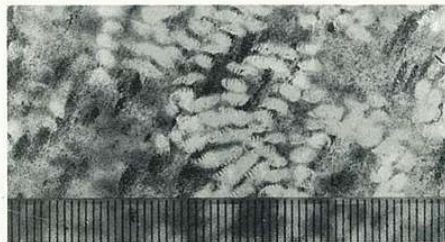
発行日　昭和61年７月

さかまた

鴨川シーワールド　NO.27

オキナエビスの飼育と生態

三億年前の姿を残し「生きた化石」として知られているオキナエビスは原始的な巻貝の特徴の一つとされているスリット（殻の口の部分にある切込み帯）を持つ美しい巻貝です。採集数が少ないため、学術的にたいへん貴重な貝としても有名です。当館ではオキナエビスの飼育を昭和59年より始め、昭和60年には世界で初めて産卵を観察することができました。今回は、オキナエビスの飼育と飼育を通して観察された生態について紹介しましょう。

東京湾（金谷～富浦沖）の水深80～150ｍ付近にかけられたヒラメの底刺網で採集されたオキナエビスは、生息環境と同じ水温（12～15℃）で飼育が始められました。搬入後のオキナエビスは採集時に受けたと思われる傷や環境の変化で死亡する個体も有り、水槽内で腹足を伸ばし動き出すまでは目が離せません。この貝の頭部にある一対の触角は、その先端部が少し外側に曲がり、吻の形とともに雄牛の頭部を連想させ、この触角を動かしながらゆっくりと移動する様子は、３億年という雄大な時の流れを感じさせます。

▲ガラス面のケイ藻を食んだ跡（最小目盛：1mm）。

海底深くに住むオキナエビスは暗い場所を好むものと考えていましたが、環境に慣れると照明に関係なく行動し、摂餌も昼夜の区別なく観察されました。餌は、採集直後に得られたオキナエビスの糞を調べ、カイメンの骨片や藻類が確認されたことを参考にして、ダイダイイソカイメン，アカヒトデ，魚肉，アサリ，カキ等を与えてみたところ、カキを最も好んで食べることがわかりました。摂餌は、口の中にある歯舌（やすりのような歯）を使い時間をかけて少しずつ食べますが、中には丸一日カキにかぶりついていた個体もありました。また水槽のガラス面に付着したケイ藻を歯舌でかじりとる様子も観察されました。

飼育中、スリットの部分から白色の粘液を出し、この粘液は水中で凝固し白い帯となって漂うことが観察されましたが、これは手を触れたり、貝が逆さにひっくり返ったりする外的な刺激が原因となり、鰓下腺より放出するものと思われます。この粘液はある種の嫌忌物質とも考えられましたが、同一水槽内の魚や無脊椎動物には特に影響はありませんでした。この粘液の持つ意味については、まだ良くわかりません。

▲スリットから白い粘液を出す。

興味ある行動の一つとして腹足尾部を殻の上部にぴたりとくっつける動作も見られました。しかし、この行動は貝殻を掃除するためなのか、それとも他に何かを意味する行動なのかはわかりませんでした。

▲腹足尾部を殻につける。

このようにオキナエビスを飼育していると、説明できない行動や疑問が次々とでてきます。産卵についても卵の受精方法を始め、幼生の生態等わからないことばかりです。もしかするとこれらの疑問の中に３億年の歴史を生き抜いてきた秘密が隠されているのかもしれません。　（津崎順）

ペンギンの人工ふ化

当館では毎年数羽のフンボルトペンギンがふ化していますが、なかには抱卵の途中で卵が割れてしまうことがあります。そうした事故を、防ぐために人工ふ化を試みました。フンボルトペンギンは、普通２卵を産卵し、親が交代で腹の下で暖め38日～42日でふ化しますが、親代わりにふ卵器を使ってふ化させようとする試みです。

ふ卵器は、今までの資料などから、気温37℃、湿度80%に定め、準備を整えました。昨年は、産卵したもののふ化の途中で失敗してしまったペアが、今年も４月はじめに、巣にこもり産卵しました。そこで、このペアの卵を使うことにしました。有精卵か無精卵かを区別出来るようになる10日目頃に２卵とも巣から取り出し、特製の光量の多い検卵器で調べたところ、両方とも有精卵でした。そこで、卵の１つは親へ戻し、残りの卵をふ卵器へ移し、人工ふ化を開始しました。転卵（卵をまんべんなく暖める為に位置をかえる）は朝、昼、夕の３回行いました。また、５日ごとに検卵を行ない発育を調べました。17日目、ヒナの発育にともない暗い陰になる部分が全体の半分に増えてきました。21日目には、気室をのぞく全体が陰となりました。以後は発育の観察が出来なくなりましたが、29日目に良く観察しているとクックッと卵全体が動き、卵の中で小さな生命が息づいていることがわかりました。そして38日目の朝、ふ卵器の扉を開けたところ、卵の一部が小さく盛りあがっていました。「はしうち」が始まっていたのです。そこで、気温、湿度が下がらぬ様ガラスの中扉を閉じたまま観察を続けましたが、ふ化は遅々として進まず、翌朝になっても小さな穴があいた程度でした。しかし昼過ぎには、穴は２cm程拡がり中からピーピーと鳴き声が聞こえ、夕方には生まれ出ようとするヒナの体の一部が見えかくれするようになりました。そして午後８時、卵全体がいびつにゆがむ程に動き、ついにヒナの頭が殻の外に出てきました。ところが首から下はまだ殻の中で動きがありません。心配していたところ、しばらくしてモゾモゾと這い出し、無事ふ化させることに成功しました。その夜はふ卵器の中に入れたまま安静を保ち翌朝体重測定をおこなったところ、84.8ｇあり、すっかり羽も乾いて、ペンギンらしい姿となっていました。そこで、海獣診療センターに設置された育すう箱に移し餌を与え始めました。育すう箱の置かれている海獣診療センターは、一般のお客様もガラス越しに観察でき、このペンギンは、早くも小さなアイドルぶりを発揮しています。幸い親が暖めていた卵も無事にふ化しましたので、自分で餌を食べられるようになる２ケ月後には兄弟対面をさせたいと考えています。しかし、無事にペンギン社会への復帰が出来るかどうか心配で、当分ヤキモキさせられそうです。

（毛利）

▲出てこい、ヒナ君！観察にも力がこもる。

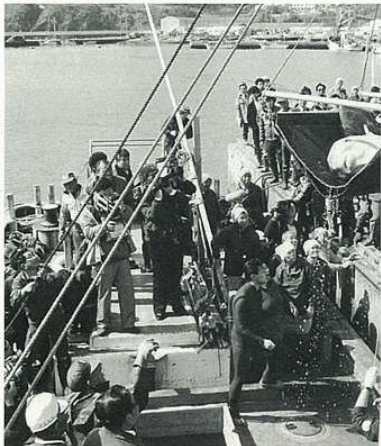
▲フーウ！やっと出られた。疲れたぁ……。

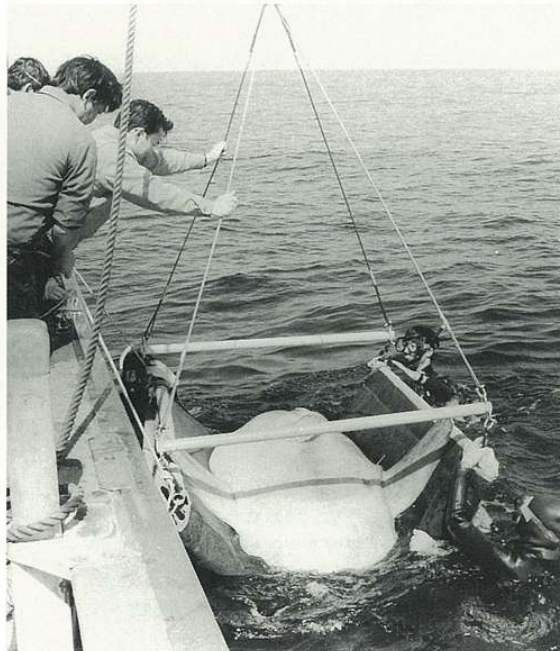
▲20日齢、体重500ｇ
１日に魚の流動食を200ｇ程たいらげます。

トピックス

マンボウ「ノロン」海へ帰る。

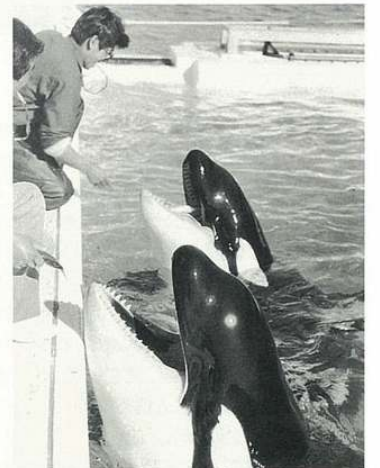
▲特製の担架で水槽からの取り上げ。

▲大勢の報道関係者の見守る中、水槽の屋上よりトラックへ。

昭和61年3月13日、多数の報道関係者が見守る中、鴨川漁業協同組合の協力のもとに、飼育世界記録を更新中のマンボウ「ノロン」（命名者・神奈川県、渡辺瑞穂様）を鴨川の沖合約30kmの黒潮海域に無事放流することに成功しました。今回の放流は、①1538日の飼育で飼育に関するデーター収集が一応できたこと。②長期間の飼育で搬入時に比べて大きく成長し水槽が手狭になったこと。③2～3月にかけて黒潮が房総半島に接近し、放流後のマンボウに対する水温や餌料に心配がないこと。④マンボウの回遊を調査すること。等の理由からです。放流されたノロンは黒潮に乗って北上した後ハワイ方面に向かって南下するという大航海に出るものと思われます。ノロンにはマンボウの回遊を解明するため、背ビレの下にJACH-8601K（JAPAN CHIBA-1986 №01 KAMO-GAWAの略）と書かれた標識がつけられています。マスコットコーナーではノロンを放流した後、仲間であったマンボウのクーキー（命名者・千葉県、鈴木啓介様）が5月12日現在飼育日数1600日の飼育世界記録を更新中です。　（津崎順）

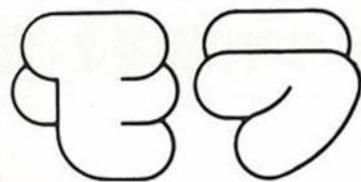
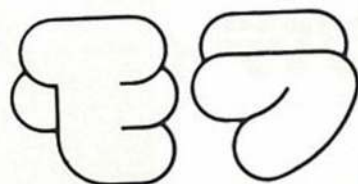
▲鴨川漁協「第一鰤丸」の活魚槽へ。

「元気でね！」の声に見送られて故郷の太平洋へ。▶

只今特訓中！シャチの「ビンゴ」と「パティー」!!

昨年の11月4日、アイスランドからやって来た2頭のシャチは将来のスーパースターを目指し、只今特訓中です。今年の春には、皆様から「ビンゴ」（雄），「パティー」（雌）という愛称もいただき、ますます乗りに乗っているスーパースタージュニアと言ったところでしょうか。

「ビンゴ」と「パティー」のショー出場に向っての本格的な訓練が開始されたのは今年の4月からです。訓練で大切な事は、動物との信頼関係を持つ事です。陸上ばかりでなく水中でもスキンシップを深めていきますが、始めは係員が水中に入っただけで警戒してしまい、寄って来ない状態でしたが、しだいに体を寄せ合い楽しく遊べる様になりました。また、ジャンプをするたびに濡れねずみになるトレーナーを尻目に、これでもかとばかり懸命に訓練に励む「ビンゴ」と「パティー」の姿は真剣そのものです。現在では10種類以上の芸を覚え、隣りのプールで活躍中のカレンに追いつけ追い越せとばかりに訓練に励んでいます。どうぞ皆様も応援して下さい。　（岡田）

▲訓練の第1歩、「ビンゴ」と「パティー」（手前）の位置付けも決まり、さあ訓練開始。

▲イルカ達とも仲良しになり、元気に訓練に励む「ビンゴ」(左)と「パティー」(右)。

トレーナーに、水中で甘える「ビンゴ」(左)と「パティー」(右)。▶

●保護されたコマッコウ

3月19日、内房の富浦で1頭のクジラが海岸に乗り上げているとの連絡を受け、さっそくシーワールドに運び、プールに放されました。このクジラは、コマッコウという珍しい種類でしたが、運ばれてすぐには餌を食べませんでした。しかし、数日後水の中に入った係員の手より少しづつ餌を食べるようになり、餌の食べ方や行動など生活の一部を観察することができました。しかし、残念なことに搬入後18日目に死亡してしまい短命に終わりましたが、貴重な資料を得ることができました。

なお、近くの海岸などにイルカ、クジラが乗り上げたり、浅瀬で泳いでいるなどの情報が得られた方は、ぜひ、鴨川シーワールド海獣保護診療センター（✆04709-3-4806）にご連絡下さい。

（桐畑）

●クジラ行動生態展示大水槽着工

62年3月完成をめざし、クジラ行動生態展示大水槽（シャチショープール）の建設工事が始まりました。このプールは、将来大きなクジラ類をより自然な状態に近い環境で飼育し、その能力の公開ができることを基本に、開館15周年の記念プロジェクトとして計画された施設です。

プールの大きさは長径33m、短径20m、水深6m、面積600㎡、水量3500tの楕円型のプールで、東洋一の規模を誇ります。

観客席もゆったりと2200席もあり、プールサイドにあるレストランからはアクリルガラスを通して水中でのクジラ類の動きが楽しめるようにも工夫されています。新プールのオープンをめざして3頭のシャチ君も特訓を行なっていますので、ご期待下さい。（榊原）

●オリジナルテレホンカード発売

カード時代と言われている現在、今一番注目を浴びているのがテレホンカードです。昭和57年12月にカード公衆電話第一号機が、東京の数寄屋橋公園に設置されてから3年6ヶ月。今や年間5千万枚以上のテレホンカードが発行され、収集マニア向け情報誌が発売されるまでになっています。

当社でも啓蒙とPRを目的に、オリジナルテレホンカードを作製しようと検討を重ねた結果、海の生きものシリーズ第一弾として、当館の人気スターである「シャチ」と「マンボウ」を作製しました。発売と同時に購入者が殺到し、全国各地から問い合わせが来る程の反響がありました。第二弾として7月には「ベルーガ」と「タカアシガニ」を発売する計画です。 更に今後共、年に5～6点作製すです。（村田）

●キタゾウアザラシ、アシカショーに一役

シーワールド・サンディエゴから、動物交換として当館にやって来た2頭のキタゾウアザラシが、今年の正月からアシカのショーに仲間入りしました。ショーの訓練を始めた頃、昼寝をしていてなかなか起きなかったり、何かに驚くと、プールの隅でじっとして動かなかったり、訓練する私たちをこまらせましたが、雰囲気にも慣れ、今ではすっかりショーで一役。キタゾウアザラシ独特の体を弓なりにそって鼻を腰にピタリとつける動作をはじめ、タオルを前肢で持ち鼻をふくなどの愛嬌を披露しています。大きな体に、とても印象的なクリクリとした大きな瞳のキタゾウアザラシは、アシカのきびきびした動きとは対象的なのんびりとした動きで、お客様の笑いを誘っています。

（高橋幸）